

# 日本語と意味的な対応のある漢越語の類推力の検証 —漢字教育における漢越語知識の有効な活用法に関する —考察—

松田真希子\*

金沢大学

受領日: 2012年 12月 3日; 受理日: 2012年 12月 20日

**Abstract.** In this paper, I made a survey to clarify that in which level Vietnamese learners can activate the "Han Viet" knowledge in Japanese Kanji learning maximally. I prepared 3 groups (NNS1: Vietnamese who have no Japanese proficiency, NNS2: elementary Japanese learners who have a little Japanese and Kanji knowledge, NS: Japanese who have no Vietnamese knowledge) and evaluated on which group can match Japanese Chinese loan words to Vietnamese words best. As a result, NNS2 could get the best of the score and NNS1 could get the worst. I achieved results that it would be better for elementary learners not to make use of the "Han Viet" knowledge excessively and also it would be effective for the intermediate Japanese learners to make use of "Han Viet" knowledge.

## 1. はじめに

ベトナム語は漢語文化圏であることより、他の非漢字圏の母語話者に比べ語彙面での優位性があると言われている。海保(2001)はベトナム語母語話者を「類縁語彙使用者」として他の非漢字圏の学習者と分けている。また、松田他(2006)ではアジア7カ国の日本語学習者の作文を形態素解析し複合名詞の異なり語数の出現頻度を比較しているが、ベトナム語母語話者の出現頻度は中国、韓国、日本に次いで多い。これは漢語を用いた名詞使用率が高いことが一因として考えられる。

一方、語彙は発音、談話などと共に言語転移を受けやすい領域と言われている(田中・阿部 1988/1989,大関(2010))。言語転移は母語と目標言語の間に対応物が見つけやすいところに起こりやすいと言われており(大関(前掲))、語彙に関しては、まさに1対1の対応関係が作られやすいため転移が大きくなりがちである。

ベトナム語と日本語の関係においては、特にその傾向はあるだろう。例えば「注意 chú ý」は音も類似しているため有名であるが、意味が部分的にずれており、「忠告」の意味はベトナム語の“ chú ý”には含まれない。

\*ĐT: 81- 76-264-5843  
Email: mts@staff.kanazawa-u.ac.jp

1) 警戒する・気をつける: chú ý

この機械を使う時は、注意が必要です。

**Cần phải chú ý khi sử dụng cái máy này.**

お足元にご注意ください。

**Hãy chú ý dưới chân của quý vị.**

2) 忠告する：nhắc nhở

宿題の未提出者に厳重な注意を与えた。

**Nhắc nhở một cách nghiêm khắc những người chưa nộp bài tập.**

ベトナム人日本語学習者の語彙使用にはこの漢字語彙の意味のずれによる誤用が

あると言われている(中川他 2006)。そのため、ベトナムで漢字教育が行われる場合、「漢越語は日本語学習に有利に働くため積極的に活用したい」と考えている教育機関と、「有利に働かないため積極的に利用しない」とする教育機関に分かれる。

最も積極的に利用している代表的機関としてはホーチミン市のドンズー日本語学校がある。そこでは学習開始時にまず漢字に対応する漢越音を約 800 字導入している(図 1)。

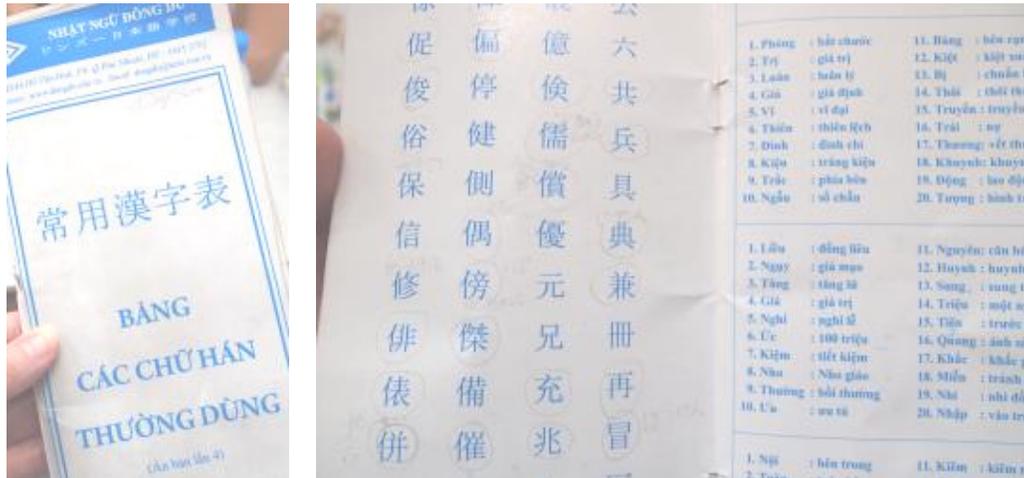


図 1 ドンズー日本語学校の常用漢字表

これは、その後の日本語学習で導入される語の漢字に漢越音をあてはめて意味を類推しやすくするのが目的と考えられる。他の日本語教育機関でも漢字の導入の際、その漢字そのものや、その漢字を用いた漢字語彙に相当する漢越音を導入する機関は多い。ハノイ国家大学外国語大学やハノイ外国語大学(現ハノイ大学)もこれに該当する(Tuyen 2003:22)。

一方、消極的立場に立つ機関では、漢越語と漢日語の意味のずれを警戒し、非漢字圏の学習者と同様に漢字を教えているようである。漢越音導入を積極的に行わない機関としてはハノイ貿易大学、ハノイ国家大学人文社会大学などがある(Tuyen 2003:22)。日本で日本語教育を受けるベトナム人学生も、漢字を学ぶ際、漢越語の知識を教室で提示されることはほとんどない。ベトナム語を漢字圏と認識している日本語教師自体が少ないようである。

一方、教える側とは異なり、ほとんどのベトナム語母語話者は自身の漢越語知識を学習に利用しているようである。ベトナム人日本語学習者の多くはメコンセンター

(1984) が作成した常用漢字表 (図 7) を携帯している。この常用漢字表を覚えることで、日本語の漢字の意味の類推を促進させているようである。



図2 常用漢字表 (メコンセンター1984) .

また、一般的に、日本語母語話者がベトナム語を学ぶ際、漢字と漢越音の一致を確認すれば、漢字知識は語彙の獲得に相当優位に働くとされている。そのため、日本のベトナム語学習機関では、漢越音と漢字との対応をかなりの時間をかけて学習する場面がある。

おそらく、漢字と漢越音の一致による効果は、日本語母語話者がベトナム語を学ぶ場合より高い効果が得られるのではないだろうか。なぜなら、日本語母語話者とは異なり、ベトナム語母語話者は漢字知識を有さないからである。日本語母語話者はその音と漢字 (文字) のイメージとを結び付けて覚えるため、その対応はエピソード化され、長期記憶に残りやすい。しかし、ベトナム語母語話者は音だけが頼りなので、記憶に残りにくいのではないだろうか。例えば日本語母語話者がベトナムの首都が「ハノイ」であると聞いても単なる外国語音だが、それが「河内」に対応していると

知った途端、強くその語がイメージされ、身近な語として記憶されるとよく聞く。そのような作業は表意文字である漢字を知識として持っているから可能なのではないだろうか。

さらに、漢越音と漢字との対応関係が知識として活性化されるのは学習初期からであろうか、それともある程度漢字を学習してからであろうか。

そこで、本稿では漢越音と漢字の一致がどの程度習得に有利に働くのか、そしてそれは書字としての漢字を有する日本語母語話者と書字としての漢字を有さないベトナム語母語話者には差があるのかを検証するための検討を行う。

## 2. 先行研究

ベトナム人日本語学習者の漢字学習における漢越語の利用について研究したもの

には, Tuyen (2003)中川他(2006), 松田他(2008)等がある。

Tuyen (2003) はベトナム人日本語学習者の漢字学習ストラテジーにおける漢越語利用の有無について調査したものである。ハノイの4つの日本語教育機関(ハノイ国家大学人文社会大学, ハノイ国家大学外国語大学, ハノイ外国語大学(現ハノイ大学), ハノイ貿易大学)で日本語を学ぶ学生416名に対して, Bourke が開発した漢字学習ストラテジーSILK (Strategies Inventory for Kanji Learning Version 1994<sup>1</sup>)を改編した質問表に基づいて調査を行った結果, 以下のことが明らかになった。

漢字学習ストラテジーをグループ別に見た場合, 「漢越音」は「感情的反応」「文脈の利用」について使用される頻度が高い<sup>2</sup> (Tuyen 2003:28-29)。

具体的なストラテジーごとに比べた場合, 特に「漢越音を覚える」, 「漢越音から連想する」というストラテジーは漢字学習ストラテジーの上位(66項目中3位と5位)に位置する<sup>3</sup>(Tuyen 2003:30)。

教育機関で漢越音を積極的に取り入れるかどうかにかかわらず, 学習者は漢越音を漢字学習ストラテジーとして積極的に利用している(Tuyen 2003:34-35)。

<sup>1</sup> <http://kanji-silk.net/profile/documents/SILK%20test%20questions.pdf>

<sup>2</sup>グループの内訳と結果(上位順)は以下の通り. 1 「感情的反応」(平均3.09/4.00以下同じ), 2 「文脈での漢字の覚え方」(2.99), 3 「漢越音」(2.97), 4 「漢字の読み方の覚え方」(2.95) 5 「漢字の形の覚え方」(2.87), 6 「漢字の意味の覚え方」(2.80), 7 「リソース」(2.79), 8 「学習計画」(2.70), 9 「ストーリー」(2.27)

<sup>3</sup>全66項目中, 1位は「知らない漢字は辞書を引いて覚える」(3.68/4.00), 2位は「繰り返し書いて書く」(3.61/4.00), 3位は「漢越音を覚える」(3.57/4.00) 4位は「同じ間違いをしないように注意する」(3.44/4.00) 5位は「漢越音から連想する」(3.43/4.00)であった。

これより, ベトナム人日本語学習者が教育機関で提供される教育内容や教育方針にかかわらず学習ストラテジーとして漢越語を積極的に活用していることがわかる。

中川(前掲)は中級レベルのベトナム人日本語学習者を対象に二音節の漢字語彙について正語判断テストと作文調査を実施した。その結果, 漢越語知識が日本語の語彙能力に影響を与えているが, 一対一の語義対応がある場合では正の転移が現れ, それに対応しない場合は, 負の転移または漢越語知識を利用していない傾向があることが明らかになった。その上で, ベトナム語を母語とする日本語学習者に対する漢字語彙指導の際は, 教師は漢越語の存在をまず認識した上で, 学習者に漢越語知識の活性化を促すことの必要性と, 学習者も漢字語彙学習の際は常に漢越語の使い方や意味と対照し学習を進めていくことが重要と報告している。

松田他(2008)ではベトナム語における漢越語と日本語の漢語の一致とずれを日本語能力試験の出題基準を基に調査した。その結果, 二字漢字語だけで見れば, 完全一致は36%で, ずれのある語を含めると54%であった。このことより, 漢字と漢越音の対応を知っていることで, 二字漢字語の5割程度の意味の類推が可能であることがわかる。また, 二字漢字語は能力試験出題語彙全体(約8000語)の46%(約5割)なので, 少なくとも出題基準語彙全体の25%(2000語)については漢越語の知識から類推可能であるといえる。級別に見た場合, 2級と1級は一致率が高く6割程度が類推可能だが, 4級や3級の語彙は固有語率が高く, 類推は働きにくいことを示している。

しかし, これらの研究においては, 結局ベトナム語母語話者の漢越語知識はどのレベルから, どの程度日本語学習に有効に

働くかに関する研究が行われていない。そこで、本研究では、漢越語の有効な活用法を検討するため、意味的に1対1の対応がある日本の漢字音と漢越音の類推、認識力をベトナム語を学ぶ日本語学習者と対比して調査することにする。

### 3. 調査方法

本研究の遂行にあたり、以下の三種類の属性の被験者を設定した。対象者数は各6名である。

1) ベトナム語の学習歴がない日本語母語話者(NS)

2) 日本語学習歴がない、またはほとんどないベトナム語母語話者(NNS1)

3) 日本語初級終了程度(漢字も150字以上既習)のベトナム語母語話者(NNS2)

次に対応語のリストを用意した。リストは主として日本語能力試験(旧)1級の語彙で構成され、どれも一対一の意味と漢字の対応がある語である。リストを表1に示す。まず、三つのグループにリスト1を約5分間見て覚えてもらった。その際、ベトナム語と日本語は漢字を共有しており、漢字語と漢越音の単語で一致するものがあるという情報を伝えた。その後リスト1の順番を並べ替えた日本語のリストを示し、対応するベトナム語を選んでもらった。

表1 リスト1事前にリストを提示し覚えさせた後でテストした語群

旧能力試験	日本語		漢字		ベトナム語	
1	ぼう	どう	暴	動	BAO	ĐỘNG
1	せん	とう	戦	闘	CHIẾN	ĐÁU
1	こ	どく	孤	独	CÔ	ĐỘC
1	こう	りつ	公	立	CÔNG	LẬP
1	び	じゅつ	美	術	MỸ	THUẬT
1	がん	か	眼	科	NHÂN	KHOA
1	でん	せつ	伝	説	TRUYỀN	THUYẾT
1	ぶつ	たい	物	体	VẬT	THỂ
1	ぶ	そう	武	装	VŨ	TRANG
4	おん	がく	音	楽	ÂM	NHẠC
3	しゅつ	ぼつ	出	発	XUẤT	PHÁT
2	い	ぎ	意	義	Ý	NGHĨA
2	どう	さ	動	作	ĐỘNG	TÁC
2	し	よう	使	用	SỬ	DỤNG
1	こう	にん	公	認	CÔNG	NHẬN
2	せい	かく	正	確	CHÍNH	XÁC
2	がい	こう	外	交	NGOẠI	GIAO
3	こう	つう	交	通	GIAO	THÔNG
1	へい	じょう	平	常	BÌNH	THƯỜNG
2	がく	りょく	学	力	HỌC	LỰC

次にリスト2の日本語のみを示し、その日本語に相当するベトナム語を選択してもらった。リスト2はリスト1にはない語だが、リスト1の漢字の組み合わせで構成

される語群であるため、それぞれの漢字と漢越音の対応の記憶が残っていれば回答できる問題である。

表2 リスト2 (テスト1の後, 事前の提示なしにテストした語群)

旧能力試験	日本語	漢字	ベトナム語	旧能力試験	日本語	漢字
1	ぼう	りょく	暴	力	BAO	LỰC
1	せん	じゅつ	戦	術	CHIẾN	THUẬT
1	こ	りつ	孤	立	CÔ	LẬP
1	どう	りょく	動	力	ĐỘNG	LỰC
3	はつ	おん	発	音	PHÁT	ÂM
1	せい	ぎ	正	義	CHÍNH	NGHĨA
1	さ	よう	作	用	TÁC	DỤNG
2	かく	にん	確	認	XÁC	NHẬN
2	げ	か	外	科	NGOẠI	KHOA
1	つう	じょう	通	常	THÔNG	THƯỜNG
1	がく	せつ	学	説	HỌC	THUYẾT
2	がく	じゅつ	学	術	HỌC	THUẬT

対象語彙は旧日本語能力試験 1 級レベルの語がほとんどで、ベトナム語母語話者の初級終了者の場合、調査語の知識はほぼない。また、日本語学習歴が全くないベトナム人学生はひらがなも読めないため、ローマ字で漢字の読みを付与したリストを見せて対応した。

NS は金沢大学国際学類及び国際学研究科の日本人学生に依頼した。NNS については北陸先端科学技術大学院大学の知識情報工学専攻の大学院生及びベトナム人教員に依頼した。

#### 4. 結果

表 3 に 3 グループのスコア, 表 4 にグループ間の差異, 表 5 にテスト間の差異を示す。調査の結果, 以下のことが明らかになった。まずベトナム語学習歴のない日

本語母語話者(NS)と日本語学習歴のないベトナム語母語話者(NNS1)の3グループの間の成績に有意な差があるか, 一元配置の分散分析を行ったところ<sup>4</sup>, TEST1 では NS と NNS1 の間で 1%水準, NNS1 と NNS2 の間で 0.1%水準で有意差がみられた。TEST2 では NS, NNS2 とともに 0.1%水準で NNS1 との間で有意差が認められた。どちらも学習歴のないベトナム語母語話者(NNS1)は, ベトナム学習歴がない日本語母語話者(NS)と日本語学習歴があるベトナム語母語話者より有意に成績が悪い結果となった。NS と NNS2 の間には有意差は見られなかった。

<sup>4</sup> 統計処理についてはフリーの統計環境 R version 2.15.0. (2012-03-30)を使用した。

表3 TEST 1 と TEST2 の結果

		TEST1(20)	TEST2(12)
日本語母語話者(NS) ベトナム語学習歴なし	JP01	20.00	12.00
	JP02	20.00	12.00
	JP03	14.00	9.00
	JP04	15.00	6.00
	JP05	20.00	10.00
	JP06	11.00	7.00
	平均	16.67	9.33
ベトナム語母語話者(NNS1) 学習歴0～かな程度	VNn01	5.00	4.00
	VNn02	5.00	3.00
	VNn03	9.00	5.00
	VNn04	3.00	0.00
	VNn05	11.00	2.00
	VNn06	8.00	5.00
	平均	6.83	3.17
ベトナム語母語話者(NNS2) 初級終了程度 (みんなの日本語1終了)	VN01	20.00	12.00
	VN02	20.00	12.00
	VN03	20.00	12.00
	VN04	19.00	12.00
	VN05	13.00	8.00
	VN06	20.00	12.00
	平均	18.67	11.33

表4 グループ間の差異(Anova)

	TEST 1	TEST 2
NNS1-NNS2	***	***
NNS1-NS	**	***
NNS2-NS	-	-

次に、NNS1、NNS2、NS の TEST1 と TEST2 の平均値間に有意な差があるか、対

応のある t 検定を行ったところ、こちらはどのグループも有意な差が見られなかった。

表5 テスト間の差異 (TEST 1-TEST 2)

	NS	NNS1	NNS2
TEST1-TEST2	-	-	-

更に、TEST 1 と TEST 2 についてピアソンの相関分析を行ったところ (図 3)、NS、NNS のどちらも強い相関が認められ

た (ピアソンの相関係数 0.8982<sup>5</sup>) つまり TEST 1 ができる人は TEST 2 もできるが

<sup>5</sup> NS だけについてもピアソンの相関係数は 0.7744 で有意であった。

TEST 1 ができない人は TEST 2 もできないという結果になった。

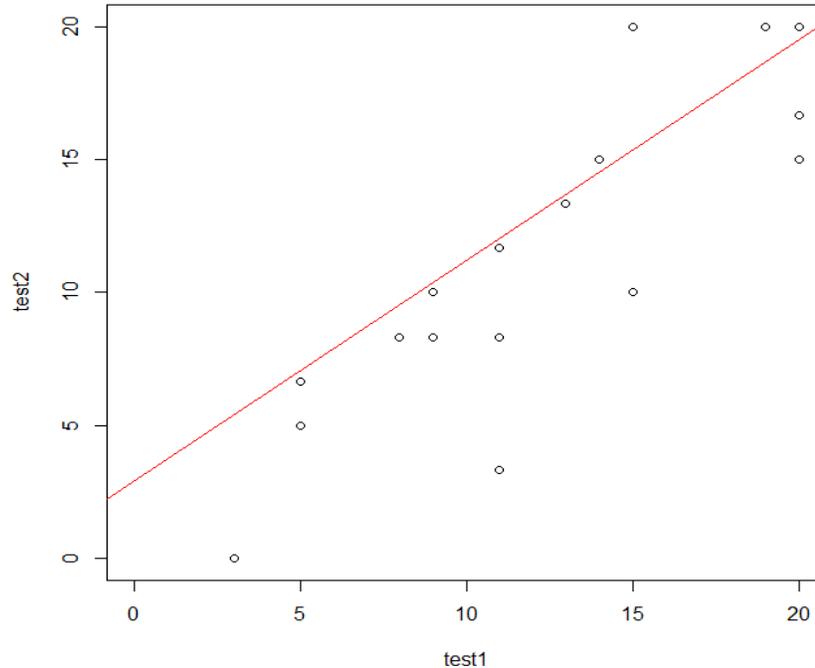


図3 プロット図と相関分析結果・全体(ピアソンの相関係数 0.904)

## 5. 考察

調査の結果、対象言語の知識がない日本語母語話者とベトナム語母語話者の成績には差があることが明らかになった。同時に、知識を与えられても与えられなくとも成績がよい人は成績がよく、悪い人は悪いという相関も認められた。

日本語能力のないベトナム語母語話者よりベトナム語能力のない日本語母語話者のほうが成績がよくなるのは、文字として漢字を有していることが有利に働いているからではないだろうか。漢字はイメージとして右脳で認知され、ローマ字・数字は左脳で認知されており、そのため、その語彙のイメージや記憶に差がつくという説はよ

く聞かれる。そのことが今回の結果にも影響していると考えられる。

一方、日本語初級終了以上(漢字教育も受けている)のベトナム語母語話者グループ(NNS2)が同様の問題を実施した場合、未知語で、能力試験1級レベルの語彙であっても、ほぼ全員が満点であった。そのことから、日本語や漢字の知識がある程度与えられれば、漢越音の知識は意味の類推に大きくプラスになることが明らかになった。恐らくベトナム語初級終了以上の日本語母語話者に同様の調査を実施すれば、好成绩になることが予想される。

したがって、初級前半レベルでは漢越語知識はさほど活性化されないが、漢字の知識がある程度備わってくる初級後半からであれば、一対一の対応がある語を覚え、

漢字の組み合わせから母語訳を類推することは学習を促進すると言える。

## 6. まとめ

漢越音と漢字の一致がどの程度日本語母語話者とベトナム語母語話者間で習得を容易にするかを調査した。その結果、以下の示唆を得た。

1) 当該言語の学習歴がない場合は日本語母語話者のほうが類推力が高い。書字としての漢字の知識の有無が対象言語の習得に影響を与える。

2) 既習歴のあるベトナム語母語話者は、非常に高い成績であったことから、ある程度日本語と漢字の学習が進んだ段階で漢越音との対応の知識が得られれば日本語の漢語の類推力や語彙習得は加速する可能性がある。

では、ベトナムではどのような漢字・語彙教育を行えばいいだろうか。過去の先行研究で指摘されているとおり、漢字語彙の意味のずれによる誤用への対応は重要である。しかし、漢越音の知識は日本語の漢語の理解に大きなプラスになる。そのため、漢越音の一致とずれの情報を盛り込み、知識を最大限活用できる教育方法の検討や学習リソースの開発は意味があると言える。

また、学習初期からの漢越語知識の大量の導入は望ましくないだろう。初期は対応があるという事実だけを伝え、漢字の知

識がある程度備わってくる初級後半からであれば、一対一の対応がある語を覚え、漢字の組み合わせから母語訳を類推すれば、効果的な活用が可能になるのではないだろうか。

## 参考文献

- [1] 海保博之・Haththoyuwa Gamage Gayathri Geethanjali(2001)「非漢字圏日本語学習者に対する効果的な漢字学習についての認知心理学からの提言」『筑波大学心理学系紀要』筑波大学
- [2] 中川康弘・小林学・徳増紀子(2006)「漢越語知識がベトナム人日本語学習者の語彙習得に及ぼす影響」『平成 18 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』99-104.
- [3] タン・ティ・キム・チュエン(2003)「ベトナム人日本語学習者の漢字学習ストラテジー」\_未刊行修士論文東京外国語大学 (Than Thi Kim Tuyen 「ベトナム人日本語学習者の漢字学習ストラテジー」\_『外国語大学論集』(ベトナム)に再録)
- [4] 松田真希子・森篤嗣・金村久美・後藤寛樹 (2006)「日本語学習者の名詞句の誤用と言語転移—アジア 7 カ国の日本語学習者の作文データに基づく分析—」『留学生教育』第 11 号, 45—53.
- [5] 松田真希子, Than Thi Kim Tuyen, Ngo Minh Thuy, 金村久美, 中平勝子, 三上喜貴 (2008)「ベトナム語母語話者にとって漢越語知識は日本語学習にどの程度有利に働くか——日越漢字語の一致度に基づく分析——」『世界の日本語教育』国際交流基金. 18-33